

サイト開設から12年、イベント参加も10年目になりました。ささやかな御礼にお送りするサイト上Notesの出張版、お楽しみ頂ければ幸いです。

天山慶路

12周年記念ペーパー/Notes出張版



◆サイト名の由来

中央アジアを東西に貫く天山山脈。その東端、中国西域には有名な敦煌があり、そこから山脈を南北に挟んで、草原の道「天山北路」、砂漠の縁を辿る「天山南路」が西に向かって延びています。十二国記を初めて読んだとき、特に高岫山のくだりを読んだ際に思い浮かべたのが、あの地の壮大な風景でした。…そうです。一字引っこ抜いてご鼠員の慶の文字を押し込みました。サイト名、一丁上がり。放浪好きの思わぬ賜物か、予想もしなかった二次創作をするようになって、これまでの旅行で目にしてきた数多くの風景がものすごく鮮やかな映像となって、書くことを助けてくれるのに気づきました。表の写真が、サイト名にもなった天山山脈です。地上で最も心を惹かれて肌が合う場所の名前を戴いたおかげか、その後のサイト運営はこの上なく幸福なものとなって現在に至ります。ちなみに、常世で一番行ってみたい場所はもちろん黄海。コスチュームなプレイをするなら頑丘と、心に固く思い定めております。

◆『魔王』

正直に告白すると、私見による十二国記最大の男前は延王尚隆(!)。今でも年に一度は何の脈絡もなく、「尚隆…なんちゅうええ男や…！」と天啓に打たれたように感じ入るのが恒例行事なのですが、ええ男は捕まえるのも難しいのが常。大分以前、うたたねをしているときに尚隆を中心とした小説を書いている夢を見て、タイトルは『魔王』、扉裏には「国を建てるには千年の歳月でも足りない。だが、それを地に倒すのは一瞬で充分である」というパイロンの引用で決まりだな！というところまで詰めておきながら、目覚めると肝心の内容がすべて記憶から消えておりました…。あまりの悔しさに忘れられず、ぐぬぬ…あの夢よカムバック…！と願い続けて早数年、逃した魚はいまだに網に戻る気配を見せません。それだけに今回カメオ出演とはいえ、ちらっと尚隆を書くことができて嬉しかったです。いつかりベンジできるかな…！

◆名もない人々の名前

原作にはない人々を登場させるときには、名前をつけないという原則を貫いています。これは、原作に敬意を払って三歩下がる、という二次創作の姿勢を（主に自分に向かって）確かめかつ戒めるためなのですが、無駄に鮮明な煩惱シアターでは、現実と同じように、すべての人物が固有の名前、そして出自と経歴を備えております。なので、むしろ書かなかった部分の方が多いのでして、故に今回の新刊に収めた挿話の元ネタのようなものが、舞台裏にはごろごろしているのですね。多分、十二国記世界の職業を100個列記したリストをもらったら、100通りの異なる短編が書けると思う…読んで面白いかどうかは別(!)というのが切ないところなのですが。

で、名前に関して過去のブツから例を挙げますと、『樹の組曲』の冬編に登場する少女は「怡春」（春に心が和む、という程の意）、『幽明境』に出てくる冬官の女性は「子夜」（真夜中の十二時の意）という名前だったりするのです。

◆湖沼の風景

初登場でいきなり過去持ちにする、という無礼を働いてしまった浩瀚には、その初登場時からセットで纏わるイメージがあり、それが麦州南部に広がる湖沼地の光景でした。(注：当然ながら捏造でござる) 以前からちらほらと顔を出しているこの湖沼地、いつかきちんと舞台に据えて書きたいと思っているのですが、なかなか機会がめぐって来ず、とはいえおかしなタイミングで驚きの方角に転がるのが身上の煩惱シアター、待てば海路の何とやらであろう…と至ってのんびり構えているのでした。新刊の挿話のタイトルである『湘君』は、漢詩「楚辞」中の九歌(作・屈原)で謳われている湖の神の名前ですが、異説ではその妻を指すとも言われています。

余談：実は拙宅の冢宰、時々眼鏡をかけておられます。たとえば『探水師』での徹夜明けに目頭を揉むシーンでは、それまでかけていた眼鏡を外したところだったのですが、文脈上、唐突に眼鏡を活写するのためらわれ、あえて触れずにおいたのでした…が。ずばりそれを見抜かれた芥瑚がおられたのでございます。おそるべし萌えの心眼。「あ、実はそうなんです」と問われてお答えしたところ、静かに萌え苦しんでおいででした…。

◆禁足地としてのフロンティア

「12年経ってもネタが尽きないのね」と時折友人達から呆れられるのですが、ふむ、今のところその気配はないみたいです(けろり)。そんな煩惱シアターの奥深く、長年の禁足地として存在する、無限の可能性を秘めたフロンティアがございます。…それはずばり、阿選×驍宗。

共に優れた軍人であり、古くからの盟友であり、最大のライバルでもあっただろうこの二人の確執について、原作は多くを語っていませんが、それ故に喚起される妄想はマグナム級です。双璧と称されながら、片や玉座に登り詰め、片やその臣に下る。雰囲気にも用兵術にも似たものがあつたという二人が、「相手の裏を掻こうと水面下で熾烈な争いをくり広げていた」というくだりだけで、二人の過去はどのようなものであつたのか、そもそもどんな風にして出逢つたのか、心強い味方として肩を並べて戦ったときもあつただろう、互いの性癖やコンプレックスが絡み合つて生まれる関係性はさぞ複雑かつ濃密なものに違いない…とあれやこれやの愛憎劇が急速ズーム・アップ、途端にぞくぞくしてくるではありませんか。(←実はすでに脳内で原型ができています)

もともと原作初読の際、「驍宗を選んだあなたが悪い」と阿選が泰麒に告げる場面で、「なんだこの血腥い痴話喧嘩みたいな台詞は」と目を刺したことをきっかけに誕生して久しいフロンティアなのですが、文章化しない理由の一つ、「その時間がないから」なのです。 (多分非常な連作長編になる…) 煩惱シアターはいまだ尽きせぬネタを上映するのにフル回転、時折他国に出張することはあつても、拠点は不動の慶東国なので、残念ながら戴に割く時間が捻出できないのでございます。しっかしこれ、本腰入れて書いたら楽しいだろうなあ…!

追記：カップリング式掛け算の前後表記につきましては、ひとまずアルファベットに準拠してお

りますが、その辺りは極めて柔軟かつ流動的であり、しかしながらおそらくこの順番が大半の場面において妥当であろう…というのが煩惱シアターの当面の見解でございます。伏礼。

◆ “No Music, No Theatre”

お粗末ながらもシアターでありますからには、当方脳内に常時搭載の煩惱シアターにも上映される映像に合わせて適宜BGMが掛かります（ふふ）。搭載元が節操のない人間ですので、流れる音楽もクラシックからダンスミュージックまで全方位型の節操なし。ほんの一部ではございますが、以下に幾つかの例をお届けいたしたく存じます。

『運河の街から』… “遠い日の記憶” by 川上ミネ／アルバム『馨』収録

たまたまテレビで印象的なピアノの旋律を耳にして、探し当てた曲。今回収録した同作品のBGMはこの曲でした。（書く機会はないと思ってたから、嬉しかったなあ…！）こんな風に、偶然聴いた音楽を探した結果それがBGMになるというパターン、実は本編の『花鳥使』でも同じだったので、こちらは映画『電車男・メインテーマ』でした。軽やかで綺麗なピアノ曲です。余談ながら以前、鹿島建設のTVCMでも美しいピアノの旋律が使われていたのですが、今も探し出せずにいます。あれ、どこかのアルバムに収録されてないのかなあ…。

『オアシス』… “Moonquake” by Robert de Boron／「Diaspora」収録

「デカログ」という本を作るとき、ウェブ上のブツから改訂する作業に一番呻吟したのがこの作品でした。つたない…つたなすぎる…！と悶絶するあまり、一時は真剣にサイト上から抹消することを検討したり、もう諦めて対になる作品『エデン』ごとなかったことにしようかと企んだりもしたのですが、この曲があったおかげで乗り切ることができました。日頃からよく聴いている、ジャンルのにはメロウ・ヒップホップと呼ばれる分野の曲なのですが、これはヴォーカルなしの旋律のみ。その旋律が非常に素晴らしく、個人的にお勧めしたい一曲です。

『回帰熱』… “Foreplay” by Tank／「Now or Never」収録

実力も筋肉もR&B界随一のアニキ、タンクによるメロウ・チューン。エロティックな歌には事欠かない…というかむしろそうじゃないブツを探す方が難しいこのジャンルですが、タイトル通りの「前戯」のみに丸々一曲を費やすという余裕と粘り腰には、なかなかお目にかかれるものではありません。痺れるぜアニキ…！と、手放して贅辞を送りたいところなのですが。

実はこの曲、『回帰熱』本編に使ったものではなく、後に発売された同アルバムを聴いていたら、完成済みの本編の裏バージョンが脳内でいきなり上映され始めてのけぞった…という曲なのです。間違いなく胸焼け必須なその後日談、いまだ文章化されることなく脳内に留まっております。そして永遠にそのままのままでいいような気もしております…。

『天の許し給うすべて』… “von” by 菅野よう子／「残響のテロル」収録

「え、何これ、こんなタイトルの作品読んだことないわよ」と思われたマドモアゼル方。正解です！まだ書いておりません！（←ハリセン頂戴仕ります） 舒栄が非常に好みの女性である、というのはサイト上でも何度となく申し上げておまして、こちらは彼女がメインに登場する予定の作品タイトル。ちょっと長いものになるかも…と思いつつ、同じく好みであるもう一人の女性の話と合わせて一冊の本にできればいいなあ、と少々具体的に考えております。

菅野よう子は、新譜が出ると何を置いてもチェックに走るアーティストの一人なのでして、このアルバムは多分アニメーション作品のサウンドトラック。本編は残念ながら存じ上げないのですが、浮遊感のあるヴォーカルによる不思議な余韻が残るこの一曲を聴いたとき、雪曇りの北国の空の下に一人きりで佇む舒栄の姿が浮かび、「とっとと書きなはれと言うことなんやな、これは」と得心した次第でございます。

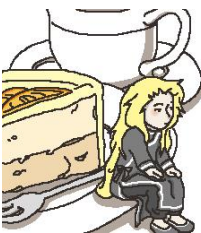
◆末声と我慢と変態と

原作に敬意を払うために守っている原則…というならば、最大のタブーはこれ。すばり「末声物」でございます。十二国記世界の創造主は原作者。すべての生殺与奪の権は当然ながらその手の内にある。であってみれば、やっぱり末声物には手を付けられないよ！ 多人死ぬし！ 国傾くし！ これについては戴国の行く末と同じく完全な傍観者側に回っとうよ！

という内なる蒼猿の声に頷きつつも、その実、まったく考えないわけでもないのです。ほんとに書いたら鳥肌立つほど面白いだろうな、と。

分かっちゃいるのです。立ち入り禁止の柵には近づきたくなくなるし、機屋を覗いてこそその鶴の恩返しだし、**変態にはタブーが最大の御馳走だ**って。もしかしたら原作でもそこまで描かれることはないのかも知れない…と思いつつも、それこそどこかの王のように、安寧の彼方に立ち昇る終焉の蜃気楼を夢見ることがあるのです。もしも原作がそこまで踏み込んで描いてくれるならば、二次創作を始めずにはいられなかった最大の魅力の一つであるこの世界の成り立ちと仕組みの謎についても、何かしらのことが分かるのではないかと。だとしたら、わたしはそれをこそ読んでみたい。他ならぬ原作者の筆によるそれを…！ で、新潮社の方角に向かって咆哮したくなるわけです。

すいません！ プレイの形式によって我慢のお作法も違ってくと思うんですが、これは焦らしと放置のどっちなんでしょうーかー！！



だんだんあぶなっかしい方に傾いてきた雰囲
気をいい感じにごまかすべく、ここで愛らしい
ケーキの景麒にご登場頂きましょう。

…Illustrated by Ms. Hal

◆ 永遠の憧憬 ◆

「ねえ、ここって確か景陽サイト&サークルなのよね…？ さっきから景陽のけの字も出てこないんだけど…？」と不審がるお声が聞こえてくるような Notes 出張版も最終ページ、真打はここにご用意いたしました。

オーギュスト・ロダン作、『大聖堂』。当方がこの世で最も愛する彫刻です。

向かい合って寄り添う、一对の男女の手。あるときは音楽を奏でているようにも思われ、あるときは大地に根を下ろした樹木のようにも見え、その時々で幾通りもの異なった物語が湧き出してくるのを感じます。

軽やかだけれど存在感があり、完成されているのに閉塞感がない。祈りを示唆する名前を与えられた一对の手、その二つの掌が象る空間の中には、きっとさまざまな謎や秘密や記憶が内包されているのですが、それらを閉ざして隠すのではなく、何かのきっかけとともに、二つの手は花が開くようにほだかれて、そこにあるものを見せてくれるのではないか。そんな風にも感じられます。

ここで原点の景陽に立ち返ってみますと、楽俊の台詞ではありませんが、陽子だけでも景麒だけでもだめで、どちらか単体のみでは煩惱も反応しなかったのだと思います。けれど、似た者同士とも正反対とも言えるこの二人が原作中で一对と定められたのを見たとき、訳の分からない蝕のようなものによって開かれた未知の扉をうっかり潜り抜けてみましたら、そこには新しい世界が広がっていた…という次第なのですね。

そして、その景陽で「どんなものを書きたいのか」と問われたとしたら、答えはおそらく「この彫刻のようなもの」ということになると思うのです。それまで自分がするとは夢にも思わなかった小説というものを書き始めて以来ずっと、この彫刻のイメージが原型として奥深くにあって、それは今も変わっていません。…12年経ってもまるで近づけた気がしないのも事実なのですが。

サイト開設以来、心底楽しみながらオン&オフともに活動を続けてこられたのは、言葉を使って書くという行為自体が持つ抗いがたい魅力のためであると同時に、それを通して驚くほどたくさんの方々とお出逢うことができたからです。一人だけの閉ざされたものだったとしたら、ここまで続けては来られなかったと思います。

これからも書きたいと思うものを楽しみながら書き続けていければとても嬉しく、それを楽しんで頂けるならいっそう幸せです。

12年分の感謝を込めて 天山慶路・暁子



『大聖堂』(La Cathedrale) オーギュスト・ロダン作/パリ・ロダン美術館

2016年5月3日 発行/天山慶路・暁子

<http://homepage3.nifty.com/tianshankeilu/top.htm>

nqf44389@nifty.com